
紅葉の季節の物語

沖田リオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉の季節の物語

【Zコード】

Z4958Z

【作者名】

沖田リオ

【あらすじ】

作家の担当を生業とする神崎は、自身が担当する天才高校生作家、四季紅葉に恋をする。何とか近づこうとするが、センセイにはなにか重大な【秘密】があるよつで

総合アシスタント会社『A11 Vision Assist』略してASAに勤める神崎かおるは人気急上昇中の担当作家の高校生四季紅葉（P・N雪城 秋）に一目惚れした。

女の子には奥手で、なかなか近づけず、まだ【本当の恋】を知らない俺に、その存在と彼女が紡ぎだす小説で【恋心】を教えてくれた。

早速アタックを試みるも、なぜかセンセイは俺を見るたびビクビクオドオド。はじめのうちはイケメンが側にいると落ち着かないといふ小説のような展開だと思っていたが、よく見るとセンセイが毎回俺を見る目には怯えの色が充満していた・・・。

心配になり先輩に相談してみると、センセイには俺に怯える重大な【コンプレックス】があるみたいで・・・？

16歳のコンプレックス持ち万能作家×25歳のちょっと一途なマネージャーの年の差恋愛物語。

「センセイ、そのコンプレックス、原因だと俺が治してあげる」

第一話

年の差つて、いつたい何歳まで許されるのだろうか。

テレビに目を向けていると、22歳差の年の差カップル誕生とか、20歳の美女が50歳年上の石油王と結婚したとか、愛さえあれば年の差なんて関係ないみたいなコトを言つてゐる人がいる。

そういう人を見ていると少し自信がでてくるが、一般の人の許容範囲外であることは間違いない。せいぜい上下5歳差が限度だろう。

でも、センセイの小説にもいたな、十六歳差のカップル。じゃあセンセイ許してくれるかな？そんな淡い期待が沸いてくるが、所詮一次元の世界でのお話。センセイは許してくれないだろう。でか俺とセンセイとの年の差つていくつだ？ 指を折つて数えてみる。

ぎりぎり足りた。九歳だ。曖昧なラインとしかいいようがない。

毎日同じコトばかり考へてる。

これがいわゆる恋煩いつてやつ？

でも、これじゃいけない。

神崎かおるは気分転換するために原稿から目を離し天井を仰ぎ見た。

そのとき視界の隅に時計が写つた。

やばつ、センセイが来る。

俺は急いで準備をし、打ち合わせ室へと向かつた。

案の定センセイは先に来ていた。ドアを二回ノックし、中に入つた。

「すみません秋センセイ、いつも遅れてしまつて」

そう声をかけると、センセイはお約束のよつとビックリと肩を震わせ、おそるおそる俺を見た。

「いえ、あの・・・私が・・・いつも早いだけですし・・・その・・・お気になさらず・・・」

「そういうわけにもいきません。センセイを待たせるなんてマネージャーとしては言語道断です」

じゃあなんで毎回遅れるんだ?

そんな田でセンセイは俺を見た。・・・まあ、怯えの色が減っただけでもずいぶんマシな方だらつ。

秋センセイ　　雪白秋センセイは本名四季紅葉、人気急上昇中の作家である。

彼女が作り出す作品は幅広い層に支持されている。

というのも、秋センセイは一つのジャンルにこだわらず、学生もの、恋愛もの、リーマン・オーラーもの・・・と数多くの作品を手掛け、その多種多様なボキャブラリーとターゲットの正確さ、キャラクターの個性豊かさが高く評価され、年齢を問わず絶大な人気と固定読者を獲得している。

「学校の方はどうですか？順調ですか？」

「あ・・・はい。特に困ったことも無く・・・」

学校という単語が出てきた。コレは仕事の話ではなく、センセイが通っている学校のことを指している。

なぜって？　センセイの正体は実は『現役女子高生』なのだ。ちなみに全国の高校生対象の模試では毎年一位を獲得しているとか。いったいどんな頭してるんだ？　もしかして頭が良いから色んな

な作品が書けるとか。

ついでにセンセイは学校に自分が作家であることを隠している。
理由はまだ知らない。

けじやつぱり・・・

「そひそろ知りたいかも・・・」

なにを？ センセイの瞳はずいぶんと正直だ。

そう思つたと同時に俺は今の気持ちを口にだしてしまつたことを
思い出した。

ただの独り言だと弁解してみたが、もう遅いだろ。だって思
つきりセンセイの田見ながらいつてたし。

センセイは訝るような表情を残しつつ、かばんの中を探つて何か
を取り出した。

「あの・・・今日は」の二作品とB・キングさんの方に読みきりを
一つ・・・」

まさにおそるおそるといった感じで原稿の入つた封筒を机の上に
差し出した。どれどれ、題名を順に見ていつた俺はその中の一つに
反応した。

「これって、【シール・ラリアット】の続編ですかー？」

思わず声を張り上げてしまった。

センセイは持つていたカップを思わず落としどになつたがなん
とか堪え、ゆっくりと視線を移動させ、俺の手の中にある原稿をみ
ながらぽつぽつと答へはじめた。

「読者のみなさんから・・・要望がありまして・・・その、何年も

前に連載は終了したはずなんですか？」

本当に不思議そうな田で原稿を見つめるセンセイは知らないのかな。

この作品は確かに何年も前に打ち切りとなつたが、その人気の高さが人を呼び、書店は入荷直後に売り切れ。予約をしてもなかなか手に入らない。印刷が終了し、重版が未定の今は、初版や全シリーズそろつたものが恐ろしい値段で取引されているという。

ちなみに俺もこの作品のファンの一人で、ある日友達に借りたらストライクゾーンで真ん中。その日からコレが忘れられず、今でもせつせと収集中。

そんな神作品を一番初めに読んでいいなんて、神様は最近良いことでもあつたのかな。

でもいつまでもシエルに固執してられないの、他の封筒にも手を伸ばした。青い封筒に手をつけたとき、センセイの持っているカツプがピクッと反応した気がする。

「『Jリーグは・・・』『ショーラティング』の続編で。Jリーグの青い封筒は・・・」

「キングさん宛ての読みきりですけど・・・」

「キング・・・ってことば、もしかして一番の得意分野のアレですか？」

「ええ、今回は新しいカツププリングに挑戦してみたんです」

センセイはわざと打つて変わつて少し笑みを浮かべ、「・・・」を入れずに俺が今持つてゐる作品について話出した。

「キングさんで、再来月刑事特集があるんです。その特集で掲載させて戴く事になりまして、思い切つてライバル同士の恋愛を書いてみたんです。でも受けの方が一方的に攻めをライバル視してて、逆に攻めは受けのことが気になつて気になつて仕方がないっていうお話です。攻め用線で書いてみました。個人的には受けが無茶してホシのアジトに乗り込んで、怪我して捕まっちゃうっていう展開が気に入っています」

時々身振り手振りをしながらこの話について説明してくれた。そこまで一気に話すとぴたつと動きを止めた。

「す・す・すいません。えと、また、勝手に一人でべらべらと…。
・
「いえいえ、自分の仕事について熱く語れるつていいことだとおもいます」

率直な意見をセンセイに言つてみた。するとセンセイはさりげなくへりて。

「でも・・・普通のラノベだとまだ分かるんですけど・・・血みどろの任侠まがいのものは・・・その・・・好みが分かれますし」

肝心なところが一番小さかつたが、慣れてる俺は簡単に聞き取れた。

成程、そういうことか。俺も確かに最初は任侠ってジャンルに驚いたけど、センセイのためなら！ となんとか耐性をつけた。

だから俺は大丈夫ですよ、と諭してみるが。「私のせいで神崎さんにおろおろされてしまった。

あれ、逆効果だつたか。焦つて弁解を試みる。

「なにも大変なことはありませんでしたよ？」
なにが大変だと思われたのですか？」

「
全部」

即答で全否定された。

・・・・・ これも聞かなきやむかつたよ。

なんとかセンセイに好かれよう好かれようと思って口を開くが、
全て空回り。

今まで人に好かれようと、ましてや異性に好意を持つてもらおうと思つて皆一二経験が無一のが、余計ダメでござつて、口をついて言つて。。。

好感度が1%も上昇しないまま、今日の打ち合わせは終了してしまった。

センセイから受け取った原稿三種類がはいった黒いブリーフケースを隣の椅子に置き、コーヒー片手にかかるは2ドラウンジの中でため息をつく。

2Fのラウンジは各階にあるラウンジよりも小さく、中も自販機とテーブルが一つ、あと椅子が向かい合わせに四脚あるだけの簡素なつくりだ。いつそ休憩所と呼んだ方があつていいかもしない。

更に階の奥にあり、近くにエレベーターも階段もないらしい。アゲセスの悪さから、昼休みになつても人が来ない。2Fにあるもう一つの大きなラウンジに人が流れているせいもあるだろう。

そんなこんなで、『』は会社で一人になりたことないまづつつけの場所だ。

（一言・・・多いんだよなあ、俺）

ブリーフケースとコーヒーを交互に見ながら反省する。背もたれに思いつきりもたれて天井を仰ぎ見ていると、扉の方から物音が聞こえた。

「あれ、かおるどうしたの？ いつになく辛氣臭くなつて」

「桜先輩」

入ってきたのは同じく作家のアシストをしている椿 桜先輩。俺の教育係でもある。茶色の髪を上でお団子にしている活発な美人だ。桜先輩には研修期間の一年とてなお世話になつた。明朗な性格でとても人当たりがいい。

「さつきまで秋先生・・・おつと、紅葉ちゃんと打ち合わせしてたんだよね？ さては何かやらかしたな新人」「・・・おつしやるとおりです」

自販機からカフェオレを買い、俺の正面の席に座つたのを見計らつてさつきの打ち合わせの内容を包み隠れず話した。

「ふんふん。それで紅葉ちゃんに嫌な思いさせてないかつて気になつてるんだ？」

「はい。あ、と思つて弁解しようとする逆に白々しく聞こえてしまつて。やつちやつたと思つても取り返しがつかなくて・・・・・・」

「そうなんだ。またか紅葉ちゃんに色々『』押ししたんじやないよ

ね？ 口調は穏やかでも態度はでかいとか

ちりり、と睨まれ、あわてて首を振る。

「してません。センセイを怖がらせないようになに色々頑張つてるので
「なら、特に紅葉ちゃん何とも思つてないよ。かおるがどんな人か
つてあたし何回も教えたし、男嫌いなのもきちんと理解しててかお
ると一緒に仕事してるんでしょ」

男嫌い。

そう、センセイは男嫌いなのだ。

だから俺がセンセイの担当になつたとき、暫く桜先輩が同席してくれた。

今はなんとか慣れてくれた。

「だから感謝しないとだよかある。高校生に気、使わせてるんだからね

「はい。今はなんとか目もあわせてくれるようになりましたし」

「なら進歩だよ。大進歩だよ。紅葉ちゃんが契約して初めてASAに挨拶に来たときなんか、まだ会社の人とか紅葉ちゃんが男嫌いだつて知らないでしょ？だから作家部の部長とか課長とかと会議室に行つたとき、入つて数秒で同伴してきたお兄さんの後ろに隠れて大号泣してたんだよ」

「うそ・・・」

あのいつも大人しそうなセンセイが大号泣するなんて、考えられない。

「ほんとほんと。その後お兄さんが部長たちに説明して、男嫌い発

覚」

「 センなんですか・・・」

新事実発覚。桜先輩はセンセイと仲がいいのでたまにこういふ話が聞ける。

最初はお兄さんと一緒に來ていたんだ・・・ん?

「 センセイ、お兄さんいたんですか?」

「 いるよ? あれ、知らない? 結構あの兄妹有名だよ」

「 えつ、誰ですか? 僕も知つてゐ人ですか?」

「 知つてゐるも何も。ASAの会社要項権バージョン。思い返してみ

なよ」

「 ええと・・・」

会社要項権バージョンとは、桜先輩が僕を教育中に教えてくれたASAの要点をまとめたものだ。

総合アシスタント会社『A11 Vision Assist』について

その名の通り、色々な夢を応援するためにマネージャーになつたり先生になつたりするプロのアシスタントが揃う会社。

会社を興したいのだったら【起業部】 会社の経営の手伝いをしてほしいのなら【秘書部】など様々一二〇に応じた人材が揃う。

総合アシスタントなので、一般教養はもちろん、その分野での教授以上の知識を持つ。

かかるの場合は、【作家部】 あまり顔を出したくない紅葉ちゃんの為に、代わりに紅葉の担当さんと会つたり、出版社との仲介をしたり、会議に同席したりする」と。

「・・・ですか？」

何回も読み返した要項を暗唱すると、先輩は「のんのん」、と首を振る。

「それもだけど、憶えて欲しい役員リスト。まさか憶えてない？」

「・・・すいません」

「そつか、そこに載つてるよ。家帰つたらもう一回読み返してね」

先輩はガタツと音を立てて立ち上がり、空になつた紙コップをゴミ箱に投げ捨てた。

俺も残つていた「コーヒーをぐいっと飲み干し、同じようにゴミ箱めがけて投げ捨てた。

ブリーフケースを持つて立ち上がり、もうひとつコーヒーを買つと、ラウンジから出かかった先輩が振り返り。

「お兄さんとはかある、仲良くなつた方がいいよ。だつて狙つてゐるでしょ？ 紅葉ちゃんのこと」

「やりと笑いながら「じゃあねん。原稿あとで読ませてね」と実際に楽しむ手を振りながら去つていく。

その言葉に含んでいたコーヒーを思いつゝ吹き出し、あやつぐブリーフケースに掛かりかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4958n/>

紅葉の季節の物語

2010年10月9日07時38分発行